

中国語短期研修の成果と課題¹⁾

宮 尾 正 樹

はじめに

昨年（2015年）9月13日～26日の14日間、お茶の水女子大学では、大学が主催するものとしては初めての中国語海外語学研修（以下、2015研修）を行った。以下、研修の実施報告を行うとともに、研修の効果（というよりもむしろ効果測定の困難）について若干の考察を加え、併せて今後の実施についてその課題を示したい。

日本の大学がグローバル化に対応する必要があることは、少なくとも言説上は多くの大学関係者に共有される認識となっている。学生の海外派遣増加はグローバル化対応方策の柱の一つであり、2013年6月に閣議決定された「日本再興戦略」や「第二期教育振興基本計画」では、2020年までに日本人の海外留学生数を倍増させる方針が定められている。大学生の留学について言えば、2011年の6万人弱から12万人に増やすことになる。それに基づき、2015年4月に内閣官房他がまとめた「若者の海外留学促進実行計画」²⁾によれば、具体的取り組みとして、留学内容の明確化と質の向上、就職への影響の回避、海外留学に係る経済的負担の軽減、学校の体制整備、安全管理、語学力の向上、留学機運の醸成、留学先に応じた対応、が挙げられている。

お茶の水女子大学は2012年度に文科省のグローバル人材育成事業に採択され、学生の留学促進、語学力向上等の取り組みを行っている。最終年度（2016年度）までに、TOEFL iBTのスコア80点以上を満たす学生の比率を取り組み開始時の10%から25%に上げる、海外留学生数を2倍にする、在学生の10%を

留学生とする、外国語で行う授業数を5倍にするなどの本学としてはチャレンジ的な数値目標を掲げており³⁾、グローバル人材育成推進センター等の部署を中心に様々な取り組みを行っている。

1. 実施までの経緯

今回の語学研修は当然「若者の海外留学促進実行計画」が掲げるような様々な課題に配慮したものであるが、実施計画を立てるにあたっては、その中でも「留学機運の醸成」に主な目的を定めた⁴⁾。研修期間を2週間と短めに設定したことにそれは端的に表れている。短期海外研修の「短期」には明確な定義があるわけではないが、一般的に2週間から3ヶ月程度とされる⁵⁾。筆者のような古い世代の人間から見ると、2週間というのは外国で言語の学習をするにはいかにも短いという気がしてならないのだが、朝日新聞と河合塾が共同で行った調査(2015年5月実施)によると、全国の国公立大学で行われている学生の海外研修の内、2週間未満のものが23%、2週間以上～1ヶ月未満のものが38%で⁶⁾、両方を合わせると、全体の64%を占める。本研修のような期間設定はむしろ主流であると言ってよいだろう。

本学の学生においても短期間の海外研修へのニーズは高い。2015年10月に、本学の中国語履修者全員を対象に実施した「海外での中国語学研修に関するアンケート」(以下、「10月アンケート」)によると、在学中に参加したい活動の中で、1～2週間の語学研修を挙げた者が55名(53%)、3～4週間の語学研修を挙げた者が33名(32%)であった。それに対し、半年～1年の留学を挙げた者は20名で、2割に満たない⁷⁾。「若者の海外留学促進実行計画」では、国大協の調査に基づいて、学生が留学を躊躇する理由として、就職への影響、経済的負担、大学の実施体制の不備、家族や教員の無理解を挙げている。それらはいずれも、滞在期間が長くなればなるほど大きな障害となりうるもので、海外研修に参加するとしても、長期よりも短期を選択する傾向の理由も説明していると言えよう。

本研修の企画実施の主体となった準備実施委員会ではできるだけ多くの学生の

研修参加を促すと同時に、研修の効果を上げることが期待される期間として、2週間を選択した。1年生が主体となるであろう研修参加者にとって、海外での学修の「お試し版」となり、そこでの成功体験が今後より長期の留学や海外体験への動機付けとなることを期待するという位置づけである⁸⁾。

研修を企画するにあたって、研修期間以外に考慮したのは、一つには、現地でのサポート体制であった。大学主催の研修としては初めてのものであること、海外での生活が初めてである参加者が多かったことなどから、参加者が学習や生活についてすぐに相談できる体制を作ることに努めた。その結果、北京外国語大学の日本語科院生が学生たちの「アドバイザー」としてずっとついてくれるサービスを提供する毎日エデュケーションを旅行委託業者として選択した。実際に、アドバイザーの続昕宇さんは学生たちと良好な関係を築いてくれた。帰国後に学生が提出したレポートでも、アドバイザーとのことに言及する者が多かった。一例だけ引用しておく。「続さんは北京外国語大学で日本語を勉強している大学院生です。自由行動以外の時間は基本的に一緒にいて、いつも質問に答えてくれたので、中国語について、文化について、見て体験して、不思議だったことなどを学びに変えてくれたとても大きな存在でした。」

企画として考慮したことの二つ目は、キャリアに関する体験を研修に組み込むことであった。日本以外の国や地域で働きたいと思わない新入社員が増えているという⁹⁾。国内外の産業社会構造が大きく転換しつつある中で、日本国内にしか職場を求めないのでは、著しく自らのキャリアの幅を狭めることになる。日本人が働く現場を見学し、その経験について話を聞くことで、海外で働くことを将来の選択肢として排除しないことに少しでも役立つようにと考えて、本学中文OGに仲介してもらい、キャノンの北京法人への訪問をスケジュールに組み込んだ。

さらに、学生の費用負担の軽減にも努めた。昨今の経済状況から、保護者からの仕送りも十分とは言えない中で¹⁰⁾、研修にかかる費用は学生にとっても保護者にとっても負担となる。「10月アンケート」でも、参加を決めるのに重視する要素について尋ねたところ、参加費用を挙げる者が最も多かった¹¹⁾。現在

では学生支援機構（JASSO）等による学生の海外研修支援が充実してきており、本研修でもその活用を目指した。研修実施を決定した時期が遅く、単独でプログラムを申請することはできず、本学提出のプログラムとして採択されていた「お茶の水女子大学 協定校派遣交換留学プログラム」の一部として、研修費用の一部を補助することができた。また、本学グローバルリーダーシップ研究所が学内公募した教育研究プロジェクト（2015年度限り）からの支援も受け、結果的には、参加者全員が費用補助を受けることになった。

語学研修の本体である授業内容については、研修先の北京外国語大学が提供するプログラムを基本的にそのまま受け入れることとした。同大学は外交官養成等、中国人に対する諸言語教育において国内最高レベルの大学だが、外国人に対する中国語教育でも定評があり、信頼に足ると判断したためであるが、2週間という短期間で語学力が実質的に向上することは見込めないという気持ちが筆者の中にあつたことは否めない。そして、後述するようにその予想は裏切られることになる。

2. 研修の経過

研修実施の告知から出発までの経過の詳細については省略する。研修実施決定が遅かったこともあり、出発前の活動としては、募集開始時と研修出発直前に、それぞれ2時間程度、旅行会社と引率教員からの説明、注意を行ったのみである。ただし、事前学習の不足が研修時に大きな障害になったとは思えない。現地に行ってからの「サプライズ」が多い方が好ましい面もあるのではないだろうか。応募後のキャンセル、出発当日の急病による参加断念などもあり、最終的に17名（1年生13名、2年生3名、3年生1名）が研修に参加し、病気も事故もなく終了して帰国できたのは何よりであった。研修の実際と参加者の反応については、『2015報告書』を参照していただくとして、主な活動について簡単に述べておく。

2. 1. 授業

北京外大の教師（いずれも対外漢語教育専門）による授業は平日（月曜～金曜）の午前中に行われた。朝8時から、50分授業4コマで、全体では40コマであるが、初日の1コマはクラス分けのための簡単なテスト、最終日は修了試験であった。習熟度別に2クラスの編成となった（上級班8人、初級班9人。「上級」と言っても相対的なものである）。いずれのクラスも使用教材は『博雅速成漢語 第一冊』（北京大学出版社）であった。中国における対外漢語教育で広く用いられている教科書だということである。初級クラスではほぼ教科書の内容に沿って授業を行い、応答練習が主であった。上級クラスでは、教科書は素材的な位置づけで、教師が宿題として出したテーマについてのプレゼンテーションを行うのが中心であった。少人数のクラスで、教師が学生の積極性を引き出す術を心得ており、どちらも非常に活発な授業となった。

学生たちは日本語を媒介としない授業にもすぐに慣れたようである。授業内容が中国での生活に即したものであったこともあり、午前中の授業で覚えた表現を午後の自由活動で実践してみるというパターンが2週間続いた。『2015報告書』から、授業に対する学生の感想をいくつか紹介しておく。

日本語で教えることはなく、すべて中国語での授業だったため、少しずつですが、耳が中国語に慣れていき、放課後の自由行動でも、値段の交渉を試みたり、食事のメニューのお勧めを聞いたり、味の好みを伝えたり、道を聞いてみたりするようになり、現地の人の話す速さにも慣れていくことができました。

私は毎晩友人とテキストの音読や単語の勉強などをしました。中国語に対してこんなに正面から向き合ったのは初めてでした。

最初の授業でほとんど聞き取れないことを自覚したため、ホテルの部屋に戻ってからリスニング教材を聞き、毎日予習復習をしました。

最も強く筆者の印象に残ったのは以下の感想である。

最終日。(略) 行員さんが何か説明してくれた。「……別の銀行、…北京銀行…」なるほど！北京銀行！別の銀行、北京銀行に行ってくれと言ってい

るのだ。「別の」も「銀行」も「北京」も授業で散々やった。これが聞き取れたとき私は興奮せざるを得なかった。中国語を聞いて、必要な情報を掴めた、役立てられたことが嬉しかった。(略) この銀行での出来事で、私は俄然中国語を使いたい欲が湧いてきた。もう最終日なのに。帰ってホテルの掃除の方と少し話した。(1年Oさん)

2.2. 自由行動

平日の午後は基本的には学生の自由に任せた。申し込み時期が遅かったこともあり、学内の寮やホテルに入れず、バスで10分ほどの距離にあるビジネスホテルを宿舎としており、昼に授業が終わると、いったん宿舎に戻ってから、あるいは大学から直接、観光や買い物に出かけることが多かったようである。前節で述べたように、学習した中国語の実践の場ともなった。やはり『2015報告書』からいくつか紹介しておく。

自由行動の時にはまず地下鉄に乗ることや入場券を買うこと、食事の時にほぼ中国語を話せないし聞き取れない自分たちだけでできるのかと不安でしたが、話せなかったとしても身振り手振りでなんとかなるものなのだということがよくわかりました。

学校からホテルまで歩いて帰ったり、いろいろな食堂で何とか中国語が話せないながらも工夫して注文したりと、いろんなことに挑戦しました。結果失敗だったことはあったけれど、そのおかげで充実した、とても楽しい2週間を過ごすことができたと感じています。

少しずつですが、耳が中国語に慣れていき、放課後の自由行動でも、値段の交渉を試みたり、食事のメニューのお勧めを聞いたり、味の好みを伝えたり、道を聞いてみたりするようになり、現地の人の話す速さにも慣れていくことができました。意思疎通ができるようになったと感じると、行動範囲が広がっていくため、頤和園、前門、北京動物園、南鑼鼓巷など多くの場所に足を運ぶことができるようになり、より一層中国での生活が楽しくなっていました。

2. 3. その他の活動

研修期間中、京劇と雑技の観劇、天安門広場と故宮博物館の見学を平日午後に行い、土曜日には長城（八達嶺）への遠足を行った。それらはいずれも旅行会社の手配によるものである。

その他に、本研修独自の活動として、キャノンの北京法人である「佳能信息技术」を訪問し、社長の井田さんと社員の日向さんから2時間にわたって話をうかがった。自由参加ではあったが、17人中13人が参加した。会社を訪れて話を聞くだけではあまり学生の印象に残らないのではないかと心配していたが、当事者が語る、北京で暮らし、働くことの苦勞や喜びに学生たちは深く印象づけられたようであった。「10月アンケート」でも、研修中の活動の中でよかったと思うものを尋ねたところ、企画者の予想に反して（?）、授業、自由行動、長城遠足に次いで多くの学生がキャノン訪問を挙げている。『2015報告書』からいくつか紹介しておく。

Canonへの企業訪問では、北京が好きで自ら北京で働きだした方・会社の都合で北京勤務になった方という対照的なお二人からお話を聞くことができました。話題は北京での暮らしから、外資系企業として中国で活動するにあたって大変なこと、中国という国の性質など多岐に渡りました。お二人の全く異なった視点からのお話を聞き、日本人として中国で働くことについて考えることができました。

人との関わりに関して、Canonを見学させていただいたときに聞いたお話も、心に残りました。国を超えて展開する企業の努力、苦勞はもちろんですが、個人個人として海外で、中国での生活上の経験談は、その見学会後の生活においての視点を変えてくれました。違うと思いつつも、意外とその環境に順応できてしまうのだなと思いました。しかも、日本の中から見ると海外のイメージだけでは、実際の生活上の出来事は割り切ることができないことが分かりました。

3. 研修の成果と課題

以上述べてきたように、2015研修は大成功であったと評価してよいと思われる。最後に、参加者の語学力向上にどのような効果があったのか、彼女たちの意識にどのような変化があったのかを見ておきたい。

3.1. 語学力

研修が学生の語学力に与えた影響を実証的に示すためには、当然ながら、研修の前後で各技能がどう変化したかをテストなどの手段を用いて測定する必要がある。その際には、研修に参加しなかった学生を統制群として、その変化が本当に研修に参加したことによるものかを検証しなければならない。効果进行分析する実験群と統制群の間では、研修参加／不参加以外の要素、例えば一般的な学力や中国語学習歴等に不均衡がないことが求められる。残念ながら、今回の研修は事前に周到な準備をしたものではなく、統計的に信頼性のある分析結果を示すことはできないが、そのような統計分析をするまでもなく、明白に正の効果があったと結論づけてもよいのではないと思われる。

まず『2015報告書』の学生レポートから見ると、授業と午後の自由行動の相乗効果により、リスニング力と会話力が2週間の間に目に見えて向上していることを実感していることがわかる。「10月アンケート」からも、多くの学生が語学力の養成に非常に役に立ったと評価していることが窺える¹²⁾。

次に、中国語担当教員の帰国後の観察によれば、参加学生には中国語を（理解可能なものとして）一生懸命に聞き入る姿勢が見られる、HSK受験もより上級の受験を目指すなど、学習意欲の向上が見られる他、スキルにおいても総合的に向上が見られ、特にリスニング力の向上が顕著である、さらには授業の牽引役となり、研修に参加しなかった他の学生にもよい影響を与えている¹³⁾。

上に述べたように、信頼性については留保すべきであろうが、2016年1月（帰国後3.5ヶ月）に団体受験したHSKの成績からも、研修が語学力養成に効果があったことが強く示唆される¹⁴⁾。今回は83名が受験した（2級38名、3級

24名、4級13名、5級7名、6級1名)。その内、研修参加者は2級5名、3級6名、4級2名(1年生1名、2年生1名)、5級2名(2年生1名、3年生1名)であった。HSKのホームページによれば、2級は「大学の第二外国語における第一年度後期履修程度」、3級は「第二外国語における第二年度前期履修程度」、4級は「第二外国語における第二年度後期履修程度」、5級は「週2～4回の授業を2年間以上」が受験の目安とされている¹⁵⁾。大学に入学してから中国語を学び始めた1年生が4級を受験する、2年生が5級を受験するのはやや無謀と言ってよいが、中国語上達への意欲の強さの表れと見ることができよう。好成绩とは言えないが、合格相当もしくは合格に近い成績を上げた¹⁶⁾。受験者数が比較的多かった2級と3級について、研修参加者と不参加者の成績を比べてみよう。

2級は受験した38名の全員が合格だった。研修参加者の平均得点は、総点183.2、聴力88.0、閲読95.2、不参加者は総点175.3、聴力82.7、閲読92.1である。3級も受験した24名全員が合格、参加者の平均点は、総点269.0、聴力89.0、閲読93.0、写作86.0、不参加者は総点261.0、聴力80.6、閲読93.0、写作87.8である。2級においては、聴力も閲読も参加者の平均点が上回るが、その差は聴力において顕著である。3級においては、聴力において参加者が顕著に上回り、閲読は同点、写作は不参加者がわずかに上回る。

この数字を見れば、研修が語学力の向上に正の効果をもたらしたと推測するのはそう無理なことではない。特に聴力の差が大きいのは、参加者の実感、教員の観察からも頷けることである。もちろん、学習歴等の要素をコントロールしていないので、この数字だけで断定することの危険性は承知した上の話である。中国語に対する学習意欲のより強い者が研修に参加したのであって、研修経験の有無に関わらず(というより、研修参加も学習意欲の強さの結果であって)、語学力が急上昇したのだという解釈も排除はできない。ただ、両グループとも、本学入学後、本学の中国語科目履修によって中国語学習を行っている者がほとんどであり、リスニング以外のスキルの成績が変わらない、あるいは差が少ないことは両グループの均質性を一定程度保証しているとは言えるのではないか。

3. 2. 意識の変化

研修の経験が語学力に与える効果については、今回はかなわなかったものの、事前に設計しておけば、客観的なデータを得ることはそう難しいことではない。だが、参加者の意識や意欲についてはデータによって示すのは困難である。アンケートや聞き取りのような手段で参加者の語りを取得して分析することが多いと思われる。本研修に関して言えば、聞き取り調査は行っていないが、帰国直後にレポートの提出を求め、それを中心に『2015報告書』をまとめている。本稿でも既にいくつか紹介しているように、参加学生が驚きと喜びを感じながら充実した日々を送ったことが伝わってくる。とはいえ、レポートを課す際に、研修で印象に残ったことというテーマのみを示し、分量もA4一枚程度としたために、本格的な分析を行うには不十分だと言える。ここでは、レポートで取り上げられた話題や感想を大雑把にまとめるだけにとどめる。

まず、参加者の心の動きである。2週間という短期間の研修だったので、異文化接触でよく言われる、高揚—反発—統合というようなプロセスが見られるわけではないが、レポートから、本文中でも触れてきた授業、自由行動や企業訪問などの経験を通じて、参加者の心理が変化したことを読み取ることができそうに思われる。

外国旅行自体が初めてだという学生が多かったこともあり、出発前には、授業についていけるか、生活がちゃんとできるか等の不安を抱いていたと述べる者が多い。そして北京に到着してからしばらくは、初めて経験することや見るものに驚きや疑問を感じ、戸惑う。次第に生活に慣れ、中国人とのコミュニケーションもとれるようになってくると、自分自身の成長や視野の広がりを実感するようになる。それがさらなる異文化体験の冒険へと誘い、研修終了時には大きな充実感を得て帰国する。と、ややできすぎていると言えなくもないが、17人のレポートを通読すると、そのようなストーリーが浮かび上がってくる。

そして、そのような経験を通じて、多くの学生が気づくのが、日本で得ていた中国情報の偏りである。「メディアの情報にはバイアスがかかっていることが多く、やはり現地で生活し現地に住む人々と直接関わってみないとわからな

いことが沢山あります。」「報道でよく耳にする中国ですが、報じられるのはほんの一部で行ってみて初めて分かることばかりだと気が付きました。」「日本ではニュースなどで中国について取り上げる時、マイナス面を大きく報じているためか、私は中国についてマイナスイメージを持っていました。しかし実際は、優しく道を教えてくれたり、私たちが外国人だと気づくと分かりやすく英語で話しかけてくれたりと、人の温かさを感じました。やはりメディアで報じられていることは物事の1つの側面に過ぎず、もっと広い目で見ると改めて考えさせられました。」等々。そしてその気づきは自らの価値観の相対化を促すことになる。

日本には馴染みのない光景がたくさんあり、とても新鮮だった。そしてそれらを当たり前として生活している現地の人々を見て、改めて日本での「普通」がすべてではないのだと感じた。

今までは、日本に来ている中国人観光客が電車で電話をしたり我先にと行動するさまを見て、なんてマナーが悪いのだろうと感じていましたが、中国ではそれがごくあたりまえのことで、彼らはただ自分のなかの常識に従って行動していただいただけなのだと感じました。それと同時に、海外における日本人も相当おかしなものではないかと思うようになりました。

3.3. 課題

本研修もその一つに数えられるであろうが、大学で実施する海外研修プログラムの評価事例について、それぞれが独自の（恣意的なという意味にとってよさそうである）評価を行っており、「研修のメリット」を宣伝するものが多いという指摘がある¹⁷⁾。本稿はその意味でも数多い研修報告の一つということになろう。実際、今回の研修は筆者の予想をはるかに超えた成功であったと思っている。『2015報告書』の「おわりに」で、筆者はやや修辭的に、「大学教師をしてもう30年になるが、学生の目の色が見る見る変わっていく姿にお目にかかるのはめったにあることではない。今回の語学研修を引率して、まさにそういう経験をした。北京空港に着いて、空港ビルから外に出た瞬間から、学生たち

の目がきらきら輝き始める。到着翌日から、午前中は中国語の授業、午後はいくつかの団体活動を除けば学生たちの自主的な活動という日々が始まり、話し方も歩き方もどんどん自信が満ちてくる。参加学生たちのそんな姿を見てみると、準備期間があまりない中で実施した、大学主催としては初めての中国語学研修だが、やってよかったと心から思うのと同時に、もっと早くから行うべきであったと反省もした。」と書いたが、それは本音である。

2016年度の研修に向けては、JASSOの短期派遣プログラムに「企業体験と異文化交流を組み込んだ北京外国語大学における中国語研修プログラム」として申請し、採択されており、研修先、研修期間等、基本的には今回の研修と同様のプログラムを組む予定である。とはいえ、今後の実施に向けての課題もある。

研修実施面においては、学生に対する周知の取り組みの早期化、15年度参加者の経験の継承を行うことで、研修参加者の幅を広げ、研修で得られる経験の深化を図ることが挙げられる。そのために、事前の説明会や勉強会を組織・実施していきたい。その際には、15年度参加者の力を借りることも考えられる。

大学として検討すべきことも多い。本学では学生の海外研修を促進するために、2014年より4学期制をとり、2学期（6月～7月）に必修科目をなるべく置かず、夏休みに海外で実施される短期プログラムに参加しやすいよう配慮しているが、現在のところ、うまく機能しているとは言えない。学生への周知の工夫、海外研修を組み込んだ履修モデルの提供、海外研修のカリキュラムへの組み込みなどの措置を講ずるべきだと思われる。詳細は承知していないが、たとえば、鹿児島大学のP-SEGプログラムは1～2週間の短期海外研修を核として、専門教育の海外研修やインターンシップ、ボランティアといった他の海外での活動につなげていく、学士課程4年間のロードマップを学生に提示している¹⁸⁾。中国語教育担当講座のみの努力でできることではないが、全学的な仕組みの構築も提言していきたい。

以上、学生たちの豊かな学びをきちんと記述できた自信はとてもないが、一つの成功事例として紹介した。海外研修に関わる方々の参考に少しでもなれば

幸いである。

注

- 1) 本稿は、中国語学研修準備・実施委員会編『2015年北京外国語大学語学研修報告書』2015年（以下、2015報告書）を主な材料とし、2015年12月のお茶の水女子大学中国学会での発表、伊藤、馮、曹、宮尾「2015年中国語学短期研修実施報告」、2015年2月の本学外国語教育センターFDワークショップでの発表、宮尾「北京の空は（少し）青かった 2015年海外研修（北京）報告」に基づき、分析を追加したものである。実施準備の経過、授業内容については、伊藤、馮、曹の『2015報告書』執筆担当部分、お茶大中文学会報告の担当部分に多くを拠っている。
- 2) 内閣官房、内閣府、外務省、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、観光庁「若者の海外留学促進実行計画」2014年。<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/ryuugaku/pdf/honbun.pdf>。
- 3) 「平成24年度グローバル人材育成推進事業構想調書」。http://www.jsps.go.jp/j-gjinzai/h24_kekka_saitaku.html。
- 4) 研修先を海外協定大学である北京外国語大学としたことで、JASSOの短期研修プログラム活用を容易にして、学生の経済的負担を減らしたこと、同大学の日本語科院生が研修中、学習面のみならず、生活面でもサポートを行うサービスを提供する旅行者（毎日エデュケーションズ）に旅行業務の委託を行ったこと、夏休み中の9月に研修時期を定めたこと、引率教員2名体制をとったこと（結果的にはやや「過保護」であったかもしれない）等、また、中国の大学における語学研修では普通のことではあるが、1クラス10名以内の習熟度別クラス編成を行ったことなどが挙げられる。このあたりについては、中国語学研修準備・実施委員会編『2015年北京外国語大学語学研修報告書』2015年（以下、2015報告書）、を参照のこと。なお、委員会のメンバーは、伊藤美重子、馮日珍、曹泰和、宮尾正樹の4名である。同報告書は紙媒体の他、お茶の水女子大学の教育研究成果コレクションTeaPotでも閲覧可能である。<http://hdl.handle.net/10083/58206>。

- 5) 工藤和宏「短期海外研修プログラムの教育的効果とは—再考と提言—」『留学交流』2011年12月号。http://www.jasso.go.jp/ryugaku/related/kouryu/2011/_icsFiles/afieldfile/2015/11/19/kazuhirokudo.pdf
- 6) 朝日新聞社、河合塾教育研究開発本部「2015年度調査結果報告」『ひらく日本の大学』第16回、2015年。http://www.keinet.ne.jp/gl/15/11/07_hiraku.pdf。
- 7) 中国語の授業時に実施。配付数104、回答数104。「海外での活動の中で、在学中に参加したいのはどれですか」の設問で、選択肢として、「1～2週間の語学研修」「1～2週間の専門分野に関わる研修」「1～2週間のインターンシップ」「1～2週間のボランティア活動」「3～4週間の語学研修」「3～4週間の専門分野に関わる研修」「3～4週間のインターンシップ」「3～4週間のボランティア活動」「半年～1年間の留学」「2年間以上の留学」「2ヶ月以上にわたる海外での職業経験やボランティア活動」「その他」を挙げ、複数回答可とした。
- 8) 学内での検討状況、研修先を協定校の北京外国語大学に決定した経緯は『2015報告書』の伊藤美重子「はじめに」を参照。
- 9) 「若者の海外留学促進実行計画」によれば、日本以外で働きたいとは思わないという回答が2001年度には29.2%だったのが、2013年度には58.3%に増加しているという（出典は、産業能率大学「第5回 新入社員のグローバル意識調査」2013年）。
- 10) 大学生協連が実施している「学生生活実態調査」によれば、2010年あたりから下落傾向に歯止めがかかっているとはいえ、2001年以前には6割以上いた「仕送り10万円以上」の学生が今では3割前後、「同5万円未満」が漸増傾向にある。これと「同0円」を合わせると、学生の約3分の1になる。http://www.univcoop.or.jp/press/life/report.html
- 11) 選択肢は以下の通り。参加費用、奨学金による支援の有無、実施時期・期間、授業内容、授業以外の活動、単位認定の有無、研修地、研修大学、宿泊環境、お茶大教員引率の有無、現地サポートの有無、家族の意見、その他。
- 12) 「中国語力の養成に立ちましたか」について、0～5点で評価。平均4.4点であった。他に「中国人とのコミュニケーション力がつきましたか」「中国に対する

中国語短期研修の成果と課題

関心が増しましたか」「中国で暮らすことに自信がつかましたか」「自分のキャリア（将来の仕事）を考える上で参考になりましたか」「参加した他の学生との交流ができましたか」「全体として、研修は成功だったと思いますか」についても評価を求めた。もっとも高得点だったのは「中国に対する関心」で4.5点、「中国語力」はそれに次ぐ。どの項目も概して高評価だったが、唯一「中国で暮らす」が2点台（2.9）だったのには苦笑せざるを得なかった。

- 13) 伊藤、馮、曹、宮尾「2015年中国語学短期研修実施報告」。
- 14) グローバル人材養成事業の取り組みの一つとして、外国語検定試験の受験料を大学が負担しており、中国語の場合、本学を準会場として筆記試験を団体受験している。残念ながら、予算の削減により、2016年度には受験料の大学負担は行われなくなる。
- 15) <https://www.hskj.jp>
- 16) 中国の大学では、本科生の入学資格としてHSKのスコアを求めるところが多く、HSK 5級で180点以上を求める大学が多い（清華大学、人民大学、南開大学等）。復旦大学のように5級250点（全ての単元で70点以上）とより高いスコアを求める大学もある。理系では4級を求めるところも多い。HSKホームページより。<https://www.hskj.jp/hsk/preferential.html>
- 17) 工藤和宏前掲論文。
- 18) 朝日新聞社、河合塾教育研究開発本部「学生の成長を促す海外研修・留学」『ひらく日本の大学』第15回、2015年。http://www.keinet.ne.jp/gl/15/09/07_hiraku1509.pdf。